

## 要因計画の模型と分散分析

広島大理 山本純恭

広島大理 藤越康祐

### §0. 要約

母数型の多元配置計画において、主効果、2要因交互作用等、いわゆる効果の定義は時に各セルにおける繰返し数が一定でない場合必ずしも明確でない。分散分析において、模型に交互作用が仮定される場合、主効果の検定に適切な平方和は主効果がどのように定義されているかに関係してくる。我々は「定義ウエイト」の概念を導入して各効果の一般的な定義を与える。各効果が一意的に定まるためのウエイトのみたすべき条件、各効果の性質、分散分析等について述べる。§1と§2において2元配置計画について述べ、§3で3元配置計画を扱う。多元配置計画への拡張は容易である。

用いる記号を整理する。

$I_s$  :  $s \times s$  の単位行列

$E_s$  : 要素がすべて1である  $s \times s$  行列

$e_s$  : 成分がすべて1である  $s$  次の列ベクトル

$A'$  : 行列  $A$  の転置行列

$A^*$  : 行列  $A$  の一般化された逆行列, すなわち  $AA^* = A$ ,  $A^*A^* = A^*$  をみたすものとする。

(E)  $A = (a_{ij})$   $n \times m$  行列  $\sum_{j=1}^m a_{ij} = 0$   $\sum_{i=1}^n a_{ij} = 0$   $\sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^m a_{ij} = 0$

○  $\text{tr} A$  : 行列  $A = (a_{ij})$  の対角線和, すなわち  $\text{tr} A = \sum a_{ii}$

○  $A \otimes B$  : 行列  $A = (a_{ij})$  と  $B$  のクロネッカー積, すなわち  $A \otimes B = (a_{ij} b_{kl})$

○  $\|x\|$  : ベクトル  $x = (x_1, x_2, \dots, x_n)$  の長さ, すなわち  $\|x\| = \sqrt{x_1^2 + x_2^2 + \dots + x_n^2}$

○  $A \oplus B$  : 行列  $A, B$  の直和

○  $R[A]$  : 行列  $A$  の列ベクトルによってはらわれるベクトル空間

○  $P[A]$  :  $R[A]$  への射影子

### §1. 2元配置計画

要因  $A_1, A_2$  の水準数をそれぞれ  $l_1, l_2$  とする.  $A_1$  の  $i_1$  水準と  $A_2$  の  $i_2$  水準の処理の組合せとして定まる  $(i_1, i_2)$  セルにおける観測値の平均を  $\eta(i_1, i_2)$  とする.  $\eta(i_1, i_2)$  は一般効果  $\mu$ ,  $A_1$  の  $i_1$  水準による主効果  $\alpha_1(i_1)$ ,  $A_2$  の  $i_2$  水準による主効果  $\alpha_2(i_2)$ , および, 交互作用  $\alpha_{12}(i_1, i_2)$  に分解される. すなわち,

$$\eta(i_1, i_2) = \mu + \alpha_1(i_1) + \alpha_2(i_2) + \alpha_{12}(i_1, i_2) \quad \dots (1.1)$$

パラメータ  $\mu, \alpha_1(i_1), \alpha_2(i_2), \alpha_{12}(i_1, i_2)$  を一意的に定義するため, 通常, 次の制約条件がおかれる.

$$\sum_{i_1=1}^{l_1} \alpha_1(i_1) = 0, \quad \sum_{i_2=1}^{l_2} \alpha_2(i_2) = 0, \quad \forall i_1, \sum_{i_2=1}^{l_2} \alpha_{12}(i_1, i_2) = 0, \quad \forall i_2, \sum_{i_1=1}^{l_1} \alpha_{12}(i_1, i_2) = 0 \quad \dots (1.2)$$

Scheffé (1959) は交互作用を一般的に定義するため非負の  $(l_1 + l_2)$  個のウエイト  $\{u(i_1)\}, \{v(i_2)\}$  を用いた一般的な制約条件

$$\sum_{i_1=1}^{g_1} u(i_1) a_1(i_1) = \sum_{i_2=1}^{g_2} v(i_2) a_2(i_2) = 0, \quad \forall i_1, \sum_{i_2=1}^{g_2} v(i_2) a_{12}(i_1, i_2) = 0, \quad \forall i_2, \sum_{i_1=1}^{g_1} u(i_1) a_{12}(i_1, i_2) = 0, \dots (1.3)$$

を与えている。(1.3)は(1.2)を含む一般的な制約条件である。しかし、この Scheffé の一般的なウエイトづりを用いても、例えば、Rao の著書(1952)等にみられる分散分析(模型に関する記述はない)の妥当性、すなわち、例えば、列主効果を消去した行主効果の平方和の非心率が行主効果のパラメーターのみに関係すると云う結果が得られないことが分った。

我々は  $g_1 g_2$  個の非負のウエイト  $\{W(i_1, i_2)\}$  を用いて、制約条件

$$\sum_{i_1=1}^{g_1} W(i_1, \cdot) a_1(i_1) = \sum_{i_2=1}^{g_2} W(\cdot, i_2) a_2(i_2) = 0, \quad \forall i_1, \sum_{i_2=1}^{g_2} W(i_1, i_2) a_{12}(i_1, i_2) = 0, \quad \forall i_2, \sum_{i_1=1}^{g_1} W(i_1, i_2) a_{12}(i_1, i_2) = 0 \dots (1.4)$$

をみたすものとして各パラメーターを定義する。ただし、

$$W(i_1, \cdot) = \sum_{i_2=1}^{g_2} W(i_1, i_2), \quad W(\cdot, i_2) = \sum_{i_1=1}^{g_1} W(i_1, i_2), \quad W(\cdot, \cdot) = \sum_{i_1=1}^{g_1} \sum_{i_2=1}^{g_2} W(i_1, i_2).$$

以下の議論において、ウエイト  $\{W(i_1, i_2)\}$  は任意の  $i_1, i_2$  に対して、 $W(i_1, \cdot) > 0, W(\cdot, i_2) > 0$  をみたすものとする。

定義

任意の  $\{\eta(i_1, i_2)\}$  に対して、制約条件(1.4)が  $\eta(i_1, i_2)$  の一意的分解(1.1)を与えるとき、ウエイト  $\{W(i_1, i_2)\}$  を定義ウエイトと云う。

要因  $A_p$  に関係する主効果のベクトルを  $Q_p$ , すなわち、

$$Q_p = (Q_p(1), Q_p(2), \dots, Q_p(g_p)), \quad p=1, 2.$$

$A_1, A_2$  に関係する交互作用のベクトルを  $Q_{12}$ , すなわち、

$$Q_{12} = (Q_{12}(1,1), Q_{12}(1,2), \dots, Q_{12}(1, g_2), Q_{12}(2,1), \dots, Q_{12}(g_1, g_2)).$$

とする.

$$\Psi = D_W \check{I}_1 \otimes \check{I}_2, \quad \Psi_1 = D_W I_1 \otimes \check{I}_2, \quad \Psi_2 = D_W \check{I}_1 \otimes I_2, \quad \Psi_{12} = D_W I_1 \otimes I_2.$$

とおく. ただし,

$$D_W = \text{diag}(\sqrt{W(1,1)}, \sqrt{W(1,2)}, \dots, \sqrt{W(l_1, l_2)}, \sqrt{W(2,1)}, \dots, \sqrt{W(l_1, l_2)}).$$

このとき, 制約条件(1.4)は次のように行列表示される.

$$\Psi' \Psi_p \underline{a}_p = 0, \quad \Psi_p' \Psi_{12} \underline{a}_{12} = 0, \quad p=1, 2.$$

とくに  $W(i_1, i_2)$  をすべて1にとると, 通常の制約条件

$$\check{I}_p' \underline{a}_p = 0, \quad p=1, 2. \quad \begin{bmatrix} \check{I}_1' \otimes I_2 \\ I_1 \otimes \check{I}_2' \end{bmatrix} \underline{a}_{12} = 0.$$

をうる.

(1.1) を行列表示し,  $D_W$  を左からかけて,

$$\Psi_{12} \underline{\eta} = \Psi^M + \Psi_1 \underline{a}_1 + \Psi_2 \underline{a}_2 + \Psi_{12} \underline{a}_{12} \quad \dots (1.5)$$

をうる. ただし,  $\underline{\eta}' = (\eta(1,1), \eta(1,2), \dots, \eta(l_1, l_2), \eta(2,1), \dots, \eta(l_1, l_2))$ . (1.5) に左から  $\Psi_p'$  をかけ, 制約条件  $\Psi_p' \Psi_{12} \underline{a}_{12} = 0$  を用いると,

$$\begin{bmatrix} \Psi_1' \\ \Psi_2' \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \Psi & \Psi_1 & \Psi_2 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} M \\ \underline{a}_1 \\ \underline{a}_2 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \Psi_1' \\ \Psi_2' \end{bmatrix} \Psi_{12} \underline{\eta} \quad \dots (1.6)$$

をうる. (1.6) はパラメーター  $M$ ,  $\underline{a}_1(i_1)$ ,  $\underline{a}_2(i_2)$  がウエイトづきの平方和

$$\sum_{i_1=1}^{l_1} \sum_{i_2=1}^{l_2} W(i_1, i_2) \{ \eta(i_1, i_2) - M - \underline{a}_1(i_1) - \underline{a}_2(i_2) \}^2 = \| \Psi_{12} \underline{\eta} - \Psi^M - \Psi_1 \underline{a}_1 - \Psi_2 \underline{a}_2 \|^2$$

を最小にするように定義されていることを示している.

定理1

次の条件は互いに同値である。

- (i)  $\{W(i, l_2)\}$  が定義ウエイトである。
  - (ii)  $\text{Rank } D_W A_{10}^\# D_W = \text{Rank } A_{10}^\#$ ,  $\text{Rank } D_W A_{01}^\# D_W = \text{Rank } A_{01}^\#$ ,  $\text{Rank } D_W A_{00}^\# D_W = \text{Rank } A_{00}^\#$ .
  - (iii)  $\text{Rank } [D_{l_2} - W D_{l_1} W'] = l_2 - 1$
  - (iv)  $[W D_{l_1} W' D_{l_2}^{-1}]^S$  の各要素がすべて正となる自然数  $S$  が存在する。
- ただし,  $A_{\varepsilon_1 \varepsilon_2}^\# = A_{\varepsilon_1}^\# \otimes A_{\varepsilon_2}^\#$ ,  $A_{\varepsilon_p}^\# = \varepsilon_p (I_{l_p} - \frac{1}{l_p} G_{l_p}) + (1 - \varepsilon_p) \frac{1}{l_p} G_{l_p}$ ,  $\varepsilon_p = 0$  又は  $1$   
 $D_W = D_W^2$ ,  $D_{l_1} = \text{diag}(W(1, \cdot), \dots, W(l_1, \cdot))$ ,  $D_{l_2} = \text{diag}(W(\cdot, 1), \dots, W(\cdot, l_2))$ ,  $W = (W(i, j))$

証明

(1.1) と (1.4) よりパラメーターの決定方程式

$$\begin{bmatrix} I_{l_1} \otimes I_{l_2} & I_{l_1} \otimes I_{l_2} & I_{l_1} \otimes I_{l_2} & I_{l_1} \otimes I_{l_2} \\ 0 & \Psi' \Psi_1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & \Psi' \Psi_2 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & \Psi_1' \Psi_{12} \\ 0 & 0 & 0 & \Psi_2' \Psi_{12} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \mu \\ \underline{a}_1 \\ \underline{a}_2 \\ \underline{a}_{12} \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 \\ \underline{1} \\ 0 \end{bmatrix} \quad \dots (1.7)$$

まうる。

(1.7) の左辺の係数行列の階数は

$$\begin{aligned} & \text{Rank } [I_{l_1} \otimes I_{l_2}, I_{l_1} \otimes I_{l_2}, I_{l_1} \otimes I_{l_2}, I_{l_1} \otimes I_{l_2}] + \text{Rank } \Psi' \Psi_1 + \text{Rank } \Psi' \Psi_2 + \text{Rank } \begin{bmatrix} \Psi_1' \Psi_{12} \\ \Psi_2' \Psi_{12} \end{bmatrix} \\ & = l_1 l_2 + 2 + \text{Rank } \Psi_{12}' [\Psi_1, \Psi_2] \end{aligned}$$

に等しい。従つて  $\{W(i, l_2)\}$  が定義ウエイトであるための必要十分条件は

$$\text{Rank } \Psi_{12}' [\Psi_1, \Psi_2] = l_1 + l_2 - 1$$

であることが分る.

$$\begin{aligned}
 \text{RANK } \Psi_{12}[\Psi_1, \Psi_2] &= \text{RANK } D_W [I_{l_1} \otimes \hat{I}_{l_2}, \hat{I}_{l_1} \otimes I_{l_2}] \\
 &= \text{RANK } D_W [I_{l_1} \otimes \hat{I}_{l_2}, \hat{I}_{l_1} \otimes I_{l_2}] [I_{l_1} \otimes \hat{I}_{l_2}, \hat{I}_{l_1} \otimes I_{l_2}]' D_W \\
 &= \text{RANK } D_W (I_{l_1} \otimes \hat{I}_{l_2} + \hat{I}_{l_1} \otimes I_{l_2}) D_W = \text{RANK } D_W (l_2 A_{10}^{\#} + l_1 A_{01}^{\#} + (l_1 + l_2) A_{00}^{\#}) D_W \\
 &= \text{RANK } D_W A_{10}^{\#} D_W + \text{RANK } D_W A_{01}^{\#} D_W + \text{RANK } D_W A_{00}^{\#} D_W \\
 &\leq \text{RANK } A_{10}^{\#} + \text{RANK } A_{01}^{\#} + \text{RANK } A_{00}^{\#} = l_1 + l_2 - I
 \end{aligned}$$

上の不等式において、等号がなりたつのは(ii)がなりたつときに限るから.

(i)と(ii)は同値である.

$$\begin{aligned}
 \text{RANK } \Psi_{12}[\Psi_1, \Psi_2] &= \text{RANK } [I_{l_1} \otimes \hat{I}_{l_2}, \hat{I}_{l_1} \otimes I_{l_2}] D_W^{-2} [I_{l_1} \otimes \hat{I}_{l_2}, \hat{I}_{l_1} \otimes I_{l_2}] \\
 &= \text{RANK } \begin{bmatrix} D_{l_1} & W \\ W' & D_{l_2} \end{bmatrix} = \text{RANK } \begin{bmatrix} I_{l_1} & -W D_{l_2}^{-1} \\ 0 & I_{l_2} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} D_{l_1} & W \\ W' & D_{l_2} \end{bmatrix} \\
 &= \text{RANK } \begin{bmatrix} D_{l_1} - W D_{l_2}^{-1} W' & 0 \\ W' & D_{l_2} \end{bmatrix} = \text{RANK } [D_{l_1} - W D_{l_2}^{-1} W'] + l_2
 \end{aligned}$$

従つて、(i)と(iii)は同値である.

(iii)と(iv)が同値であることを示す。(iv)は Perron の定理から、 $W D_{l_2}^{-1} W' D_{l_1}^{-1}$  の最大固有値が単根であることと同値である。 $W D_{l_2}^{-1} W' D_{l_1}^{-1}$  の固有根を  $\rho$  とすると、

$$|W D_{l_2}^{-1} W' D_{l_1}^{-1} - \rho I| = |D_{l_1}^{-\frac{1}{2}}| |D_{l_1}^{\frac{1}{2}} W D_{l_2}^{-1} W' D_{l_1}^{-\frac{1}{2}} - \rho I| |D_{l_1}^{-\frac{1}{2}}|$$

であるから、 $\rho$  は非負である。 $W D_{l_2}^{-1} W' D_{l_1}^{-1}$  は各要素が非負で、

$$\hat{I}_{l_1} W D_{l_2}^{-1} W' D_{l_1}^{-1} = \hat{I}_{l_1}$$

をみたすから確率行列である。従つて、 $0 \leq \rho \leq I$  で  $\rho = I$  の根を少くとも一つもっていることが分る。一方、 $D_{l_1}^{-\frac{1}{2}} (D_{l_1} - W D_{l_2}^{-1} W') D_{l_1}^{-\frac{1}{2}}$  の固有根は  $I - \rho$

であり、零でない固有根の数は  $D_{q_1} - W D_{q_2} W'$  の零でない固有根の数と等しい。  
従って、(III)と  $W D_{q_2} W' D_{q_1}$  の最大固有根が単根であることは互に同値である。  
従って、(III)と (IV)は同値となる。

### 定理2

ある定義ウエイトから定まる交互作用がすべて零であると、任意の定義ウエイトから定まる交互作用もすべて零になる。このとき、主効果  $\{a_i(i_i)\}$ 、又は  $\{a_2(i_2)\}$  の対比は定義ウエイトに関係しない。

### 証明

ある定義ウエイト  $\{W(i_1, i_2)\}$  から定まる  $M$ ,  $a_1(i_1)$ ,  $a_2(i_2)$ ,  $a_{12}(i_1, i_2)$  を  $M^{(0)}$ ,  $a_1^{(0)}(i_1)$ ,  $a_2^{(0)}(i_2)$ ,  $a_{12}^{(0)}(i_1, i_2)$  で表わし、

$$\text{任意の } i_1, i_2 \text{ に対して, } a_{12}^{(0)}(i_1, i_2) = 0$$

とする。このとき、

$$\eta(i_1, i_2) = M^{(0)} + a_1^{(0)}(i_1) + a_2^{(0)}(i_2) \quad \dots (1.8)$$

任意の定義ウエイト  $\{W(i_1, i_2)\}$  に対して、(1.6)より、

$$\begin{bmatrix} W_{q_1} & D_{q_1} & W \\ W_{q_2} & W' & D_{q_2} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} M \\ a_1 \\ a_2 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \Psi_1' \\ \Psi_2' \end{bmatrix} \Psi_{12} \mathbf{1} \quad \dots (1.9)$$

をうる。ただし、 $W_{q_1} = (W(1, \cdot), \dots, W(q_1, \cdot))$ ,  $W_{q_2} = (W(\cdot, 1), \dots, W(\cdot, q_2))$ , (1.8)

を(1.9)に代入して、整理すると、

$$\begin{bmatrix} W_{q_1} & D_{q_1} & W \\ W_{q_2} & W' & D_{q_2} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} M - M^{(0)} \\ a_1 - a_1^{(0)} \\ a_2 - a_2^{(0)} \end{bmatrix} = 0$$

まうる。ただし  $a_p^{(0)} = (a_p^{(0)}(i_1), \dots, a_p^{(0)}(i_p))$ ,  $p=1, 2$ .

$\{W(i_1, i_2)\}$  が定義ウエイトであるから

$$\text{Rank} \begin{bmatrix} W_{i_1} & D_{i_1} & W \\ W_{i_2} & W' & D_{i_2} \end{bmatrix} = \text{Rank} \begin{bmatrix} D_{i_1} & W \\ W' & D_{i_2} \end{bmatrix} = i_1 + i_2 - 1$$

である。

行列  $\begin{bmatrix} 1 & -i_1 & 0 \\ 1 & 0 & -i_2 \end{bmatrix}$  の各行ベクトルは行列  $\begin{bmatrix} W_{i_1} & D_{i_1} & W \\ W_{i_2} & W' & D_{i_2} \end{bmatrix}$  のそれぞれ  $i_1$  行ベ

クトルと直交し、その階数は2である。従つて

$$\mu - M^{(0)} = b_1 + b_2 \quad (1.10)$$

$$a_p(i_p) - a_p^{(0)}(i_p) = -b_p, \quad p=1, 2.$$

まうる。ただし、 $b_1, b_2$  は任意の定数である。(1.10)より

$$\mu + a_1(i_1) + a_2(i_2) = M^{(0)} + a_1^{(0)}(i_1) + a_2^{(0)}(i_2) = \eta(i_1, i_2)$$

まうる。従つて、任意の  $i_1, i_2$  に対して、 $a_2(i_1, i_2) = 0$  とする。  $\sum_{i_p} \lambda_p(i_p) = 0$

なる任意の  $\{\lambda_p(i_p)\}$  に対して、(1.10)から容易に

$$\sum_{i_p} \lambda_p(i_p) a_p(i_p) = \sum_{i_p} \lambda_p(i_p) a_p^{(0)}(i_p), \quad p=1, 2.$$

まうる。

## §2. 分散分析

定義ウエイト  $\{W(i_1, i_2)\}$  から定まる各効果に関する分散分析を考える。

$(i_1, i_2)$  セルにおける観測値を  $y(i_1, i_2, k)$ ,  $k=1, 2, \dots, \pi(i_1, i_2)$  とし、次の模型

をおく。



$$\Omega \begin{cases} Y(\bar{i}_1, \bar{i}_2, k), \bar{i}_1=1, \dots, l_1, \bar{i}_2=1, \dots, l_2, k=1, \dots, n(\bar{i}_1, \bar{i}_2) \text{ は互に独立で, 平均 } \eta(\bar{i}_1, \bar{i}_2), \text{ 分散 } \sigma^2 \text{ の正規分布に従う.} \\ \eta(\bar{i}_1, \bar{i}_2) = \mu + \alpha_1(\bar{i}_1) + \alpha_2(\bar{i}_2) + \alpha_{12}(\bar{i}_1, \bar{i}_2). \\ \text{各パラメータ } \mu, \alpha_1(\bar{i}_1), \alpha_2(\bar{i}_2), \alpha_{12}(\bar{i}_1, \bar{i}_2) \text{ は (1.4) の制約条件をみたす.} \end{cases}$$

このとき, 仮説

$$\omega_1: \Omega \text{ \& } \alpha_{12} = 0$$

$$\omega_2: \Omega \text{ \& } \alpha_1 = 0$$

の尤度比検定(L.R.T.)を考える. 次の行列記号を用いる.

$$Y' = (Y(1,1,1), \dots, Y(1,1, n(\bar{i}_1, \bar{i}_2)), Y(1,2,1), \dots, Y(1,2, n(\bar{i}_1, \bar{i}_2)), Y(2,1,1), \dots, Y(l_1, l_2, n(\bar{i}_1, \bar{i}_2)))$$

$$\bar{X} = \bar{X} \pi, \quad \pi = \sum_{\bar{i}_1} \sum_{\bar{i}_2} \pi(\bar{i}_1, \bar{i}_2),$$

$$Y_p(\alpha, \bar{i}_2) = \begin{cases} 1 & \alpha \text{ 番目の観測値が要因 } A_p \text{ の } \bar{i}_2 \text{ 水準の処理を受けたとき.} \\ 0 & \text{そうでないとき.} \end{cases}$$

$$r = (\bar{i}_1 - 1)l_2 + \bar{i}_2 \text{ に対して}$$

$$Y_{12}(\alpha, r) = \begin{cases} 1 & \alpha \text{ 番目の観測値が要因 } A_1 \text{ の } \bar{i}_1 \text{ 水準の処理と } A_2 \text{ の } \bar{i}_2 \text{ 水準の} \\ & \text{処理を受けたとき.} \\ 0 & \text{そうでないとき.} \end{cases}$$

$$\bar{X}_p (n \times l_p) = (Y_p(\alpha, \bar{i}_1)), \quad p=1, 2. \quad \bar{X}_{12} (n \times l_1 l_2) = (Y_{12}(\alpha, r)).$$

このとき,

$$E Y = \bar{X} \mu + \bar{X}_1 \alpha_1 + \bar{X}_2 \alpha_2 + \bar{X}_{12} \alpha_{12}$$

となる.  $E Y = \bar{X}_{12} \mathbb{1}$  なることと任意の  $\mathbb{1}$  に対して, 制約条件(1.4)をみたす

$\mu, \alpha_1(\bar{i}_1), \alpha_2(\bar{i}_2), \alpha_{12}(\bar{i}_1, \bar{i}_2)$  が存在することから,  $\Omega$  のもとで,

$$\{E\beta\} = R[\Phi_{12}]$$

をうる。又、 $\omega_1$ のもとで

$$\{E\beta\} = R[\Phi_1, \Phi_2]$$

なることが分る。従つて、 $\omega_1$ のL.R.T.の統計量は

$$F_1 = \frac{f_e}{f_1} \frac{\chi^2(P[\Phi_{12}] - P[\Phi_1, \Phi_2])}{\chi^2(I_n - P[\Phi_{12}])}$$

と同値である。ただし、 $f_e = n - \text{tr}P[\Phi_{12}]$ ,  $f_1 = \text{tr}P[\Phi_{12}] - \text{tr}P[\Phi_1, \Phi_2]$ 。一般に  $F_1$ は自由度  $f_1$ ,  $f_e$ の非心率  $\frac{1}{2\sigma^2} \beta' \Phi_{12} \Phi_{12} (P[\Phi_{12}] - P[\Phi_1, \Phi_2]) \Phi_{12} \beta$ をもつ非心F-分布に従う。 $\omega_1$ のL.R.T.の統計量は定義ウイットに關係しないことが分る。

$\omega_2$ のL.R.T.は定義ウイットに關係する。条件付きの最小自乗法に關連する補題を述べる。

### 補題1

ベクトル空間  $V = \{A\beta \mid H\beta = 0\}$ への射影子  $R_V$ は

$$R_V = A(A'A)^*A' - A(A'A)^*H_1(I_m - P[H_2])\{ (I_m - P[H_2])H_1(A'A)^*H_1(I_m - P[H_2]) \}^* (I_m - P[H_2])H_1(A'A)^*$$

で与えらぬ。ただし、 $A(n \times m)$ ,  $H(m \times l)$ は擬正の行列、 $\beta(m \times 1)$ はパラメータベクトル、 $H_1 = P[A']H$ ,  $H_2 = (I_m - P[A])H$ 。

### 証明

制約条件  $H'\beta = 0$ のもとで、 $(y - A\beta)'(y - A\beta)$ を最小にする  $\beta$ を  $\hat{\beta}$ とすると、 $\Delta(l \times 1)$ を Lagrange 乗数として

$$\left. \begin{aligned} A'A\hat{\beta} &= A'y + H\Delta \\ H'\hat{\beta} &= 0 \end{aligned} \right\} \dots (2.1)$$

の解として与えられる。このとき、

$$Ry \equiv A\hat{z}$$

が成立する。(2.1)の最初の方程式は

$$H_2\lambda = 0$$

$$A'A\hat{z} = A'y + H_1\lambda$$

と同値であるから、

$$\lambda = (I_l - P[H_2])u_1$$

$$\hat{z} = (A'A)^*A'y + (A'A)^*H_1(I_l - P[H_2])u_1 + (I_m - P[A'])u_2$$

をうる。ただし、 $u_1(l \times 1)$ 、 $u_2(m \times 1)$  は任意の定数ベクトル。従って、

$$\hat{z} = (A'A)^*A'y + (A'A)^*H_1(I_l - P[H_2])u_1 + (I_m - P[A'])u_2 \quad \dots (2.2)$$

をうる。(2.2)に左からAをかけて

$$A\hat{z} = A(A'A)^*A'y + A(A'A)^*H_1(I_l - P[H_2])u_1 \quad \dots (2.3)$$

をうる。 $H'\hat{z} = 0$  をみたすように  $u_1$ 、 $u_2$  をきめるとよい。(2.2)に左からH'をかけて

$$H'(A'A)^*A'y + H'(A'A)^*H_1(I_l - P[H_2])u_1 + H_2'u_2 = 0 \quad \dots (2.4)$$

をうる。(2.4)は

$$\left. \begin{aligned} (I_l - P[H_2])H_1'(A'A)^*A'y + (I_l - P[H_2])H_1'(A'A)^*H_1(I_l - P[H_2])u_1 &= 0 \\ P[H_2]H_1'(A'A)^*A'y + P[H_2]H_1'(A'A)^*H_1(I_l - P[H_2])u_1 + H_2'u_2 &= 0 \end{aligned} \right\} \dots (2.5)$$

と同値である。(2.5)をみたす  $u_1$ 、 $u_2$  は存在して、 $u_1$  は

$$\begin{aligned} u_1 = & -\{(I_l - P[H_2])H_1'(A'A)^*H_1(I_l - P[H_2])\}^* \{(I_l - P[H_2])H_1'(A'A)^*A'y \\ & + (I_l - P[(I_l - P[H_2])H_1'(A'A)^*H_1(I_l - P[H_2])])\}u_3 \quad \dots (2.6) \end{aligned}$$

で与えられる。ただし、 $u_3(l \times 1)$  は任意の定数ベクトル。(2.3)と(2.6)から補

題の結果をうる.

補題1において,  $R[H] \subseteq R[A]$  のとき  $R$  は

$$R = A(AA')^{-1}A' - A(AA')^{-1}H[H'(AA')^{-1}H]^{-1}H'(AA')^{-1}A'$$

となる.

$\omega_2$ のもとにおけるベクトル空間  $\{E_2\}$  への射影子  $P_{\omega_2}$  は若干の計算の結果, 上の補題を用いて整理することにより,

$$P_{\omega_2} = P[\Phi_2] - \hat{\Phi}_{12}(\hat{\Phi}_{12}\hat{\Phi}_{12}')^{-1}U_1'(I - P[U_2])(I - P[U_2])^{-1}U_1(\hat{\Phi}_{12}\hat{\Phi}_{12}')^{-1}U_1'(I - P[U_2])^{-1}(I - P[U_2])^{-1}U_1(\hat{\Phi}_{12}\hat{\Phi}_{12}')^{-1}\hat{\Phi}_{12}' \\ (= P[\Phi_2] - P_{\Omega\omega_2}) \text{ とおく}$$

で与えられる. ただし,  $\hat{\Phi}_{12} = (I_n - P[\Phi_2])\Phi_{12}$ ,  $U = \Psi_{12}'[\Psi_1, \Psi_2]$ ,  $P[\hat{\Phi}_{12}']U = U_1$ ,  $(I_{\Omega\omega_2} - P[\hat{\Phi}_{12}'])U = U_2$ . 従つて,  $\Omega$ のもとでの  $\omega_2$  の L. R. T. の統計量は

$$F_2 = \frac{f_1}{f_2} \frac{\sum P_{\Omega\omega_2} y}{\sum (I_n - P[\Phi_2]) y}$$

で与えられる. ただし,  $f_2 = n - P_{\Omega\omega_2}$ .  $F_2$  は一般に自由度  $f_2$ ,  $f_1$  の非心率  $\frac{1}{2\sigma^2} U_1' \Phi_1' P_{\Omega\omega_2} \Phi_1 U_1$  をもつ非心 F-分布に従う.

とくに,  $\{w(i, i_2)\}$  として, 各セルの観測値に比例したウエイト  $\{\pi(i, i_2)\}$  をとり,  $\{\pi(i, i_2)\}$  が定義ウエイトであるとする. このとき, 制約条件(1.4) は

$$\Phi_p' \Phi_p Q_p = 0, \quad \Phi_p' \Phi_{12} Q_{12} = 0, \quad p=1, 2.$$

となる. 又

$$P_{\Omega\omega_2} = P[\Phi_1, \Phi_2] - P[\Phi_2]$$

となるから,  $\omega_2$  の L. R. T. は

$$\frac{f_e}{l_1 - 1} \cdot \frac{\sum (P[\Phi_1, \Phi_2] - P[\Phi_2])^2}{\sum (I_n - P[\Phi_2])^2}$$

で与えられる。

$$(P[\Phi_2] - P[\Phi_1, \Phi_2])(P[\Phi_1, \Phi_2] - P[\Phi_2]) = 0$$

であるから、 $W_1, W_2$ のテストにおいて、分子の統計量は互に独立である。任意の $i_1, i_2$ に対して、 $\pi(i_1, i_2) > 0$ のとき、 $f_e = \pi - l_1 l_2$ で、分散分析は Raoの著書(1952)にみられる

$$\begin{aligned} \sum (I_n - P[\Phi_2])^2 &= \sum (I_n - P[\Phi_2])^2 + \sum (P[\Phi_2] - P[\Phi_1, \Phi_2])^2 + \sum (P[\Phi_1, \Phi_2] - P[\Phi_2])^2 \\ &\quad + \sum (P[\Phi_2] - P[\Phi_1])^2 \end{aligned}$$

になる。

### §3. 3元配置計画

要因 $A_1, A_2, A_3$ の水準数をそれぞれ $l_1, l_2, l_3$ とする。各要因 $A_p$ の $i_p$ 水準の処理の組合せとして定まる $(i_1, i_2, i_3)$ セルにおける観測値の平均を $\eta(i_1, i_2, i_3)$ とする。一般効果を $\mu$ 、要因 $A_p$ に關係する主効果のベクトルを

$$\underline{a}_p = (a_p(1), a_p(2), \dots, a_p(l_p)), \quad p=1, 2, 3.$$

要因 $A_p, A_q$ に關係する2要因交互作用のベクトルを

$$\underline{a}_{pq} = (a_{pq}(1,1), \dots, a_{pq}(1, l_q), a_{pq}(2,1), \dots, a_{pq}(l_p, l_q)), \quad 1 \leq p < q \leq 3.$$

要因 $A_1, A_2, A_3$ に關係する3要因交互作用のベクトルを

$$\underline{a}_{123} = (a_{123}(1,1,1), \dots, a_{123}(1,1, l_3), a_{123}(1,2,1), \dots, a_{123}(1, l_2, l_3), a_{123}(2,1,1), \dots, a_{123}(l_1, l_2, l_3)).$$

とする。  $\eta(i_1, i_2, i_3)$ は

$$\gamma(i_1, i_2, i_3) = \mu + \sum_{p=1}^3 a_p(i_p) + \sum_p \sum_{\substack{q \\ 1 \leq p < q \leq 3}} a_{pq}(i_p, i_q) + a_{123}(i_1, i_2, i_3) \quad \dots (3.1)$$

なる構造をもっている。

$i_1, i_2, i_3$  個の非負のウエイト  $\{W(i_1, i_2, i_3)\}$  を導入し、次の制約条件をみたすものとして各パラメーターを定義する。

$$\left. \begin{aligned} \sum_{i_p} \sum_{i_1} \sum_{i_2} W(i_1, i_2, i_3) a_p(i_p) &= 0, \quad \{i_p, i_1, i_2\} = \{i_1, i_2, i_3\} \\ &P=1, 2, 3. \\ \sum_{i_s} \sum_{i_1} W(i_1, i_2, i_3) a_{pq}(i_p, i_q) &= 0, \quad \{i_p, i_q, i_1\} = \{i_1, i_2, i_3\} \\ &1 \leq p < q \leq 3, \quad s = p \text{ 又は } q \\ \sum_{i_p} W(i_1, i_2, i_3) a_{123}(i_1, i_2, i_3) &= 0, \quad P=1, 2, 3. \end{aligned} \right\} \dots (3.2)$$

定義

任意の  $\{\gamma(i_1, i_2, i_3)\}$  に対して、制約条件(3.2)が  $\gamma(i_1, i_2, i_3)$  の一意的分解(3.1)を与えるとき、ウエイト  $\{W(i_1, i_2, i_3)\}$  を定義ウエイトと云う。

以下の議論において、任意の  $P$  に対して、 $\sum_{i_p} W(i_1, i_2, i_3) > 0$  を仮定する。

制約条件(3.2)を行列表示するため次の記号を用いる。

$$F_{b_1 \dots b_3}^{(123)} = H_1 \otimes H_2 \otimes H_3$$

とする。ただし、

$$H_p = \begin{cases} I_{q_p} & p = b_1, \dots, \text{又は } b_3 \text{ のとき} \\ \underline{1}_{q_p} & \text{そうでないとき} \end{cases} \quad p=1, 2, 3.$$

$b_1 < \dots < b_3$  は  $S$  個の相異なる整数であり、 $F^{(123)} = \underline{1}_{q_1} \otimes \underline{1}_{q_2} \otimes \underline{1}_{q_3}$  である。

$$D_w^{(3)} = \text{diag}(\sqrt{W(1,1,1)}, \dots, \sqrt{W(1,1,b_3)}, \sqrt{W(1,2,1)}, \dots, \sqrt{W(1,b_2,b_3)}, \sqrt{W(2,1,1)}, \dots, \sqrt{W(2,b_2,b_3)})$$

とし

$$\Psi_{b_1 \cdot b_2}^{(123)} = D_{\overline{W}}^{(3)} F_{b_1 \cdot b_2}^{(123)}$$

とする。このとき、制約条件(3.2)は

$$\Psi^{(123)} \Psi_P^{(123)} \underline{a}_P = 0, \quad P=1, 2, 3.$$

$$\Psi_{\overline{P}}^{(123)} \Psi_{P\overline{Q}}^{(123)} \underline{a}_{P\overline{Q}} = 0, \quad \overline{P} = P, \text{ 又は } \overline{Q}, \quad 1 \leq P < \overline{Q} \leq 3.$$

$$\Psi_{P\overline{Q}}^{(123)} \Psi_{123}^{(123)} \underline{a}_{123} = 0, \quad 1 \leq P < \overline{Q} \leq 3.$$

と表わせる。とくに  $W(l_1, l_2, l_3)$  をすべて 1 にとると通常の制約条件

$$\underline{a}_P = 0, \quad P=1, 2, 3.$$

$$\begin{bmatrix} \underline{a}_P \otimes I_{\overline{Q}} \\ I_P \otimes \underline{a}_{\overline{Q}} \end{bmatrix} \underline{a}_{P\overline{Q}} = 0, \quad 1 \leq P < \overline{Q} \leq 3.$$

$$\begin{bmatrix} \underline{a}_1 \otimes I_2 \otimes I_3 \\ I_1 \otimes \underline{a}_2 \otimes I_3 \\ I_1 \otimes I_2 \otimes \underline{a}_3 \end{bmatrix} \underline{a}_{123} = 0.$$

になる。

(3.1) を行列表示し、 $D_{\overline{W}}^{(3)}$  を左からかけて、

$$\Psi_{123}^{(123)} \underline{\eta} = \Psi^{(123)} \underline{\mu} + \sum_{P=1}^3 \Psi_P^{(123)} \underline{a}_P + \sum_P \sum_{\substack{\overline{Q} \\ 1 \leq P < \overline{Q} \leq 3}} \Psi_{P\overline{Q}}^{(123)} \underline{a}_{P\overline{Q}} + \Psi_{123}^{(123)} \underline{a}_{123} \quad \dots (3.3)$$

をうる。ただし、

$$\underline{\eta} = (\eta(1,1,1), \dots, \eta(1,1,l_3), \eta(1,2,1), \dots, \eta(1,l_2,l_3), \eta(2,1,1), \dots, \eta(l_1,l_2,l_3)).$$

(3.3) に左から  $\Psi_{P\overline{Q}}^{(123)}$  をかけ、制約条件  $\Psi_{P\overline{Q}}^{(123)} \Psi_{123}^{(123)} \underline{a}_{123} = 0$  ( $1 \leq P < \overline{Q} \leq 3$ )

を用いると、

$$\chi^{(2)} [\chi^{(0)}, \chi^{(1)}, \chi^{(2)}] \begin{bmatrix} \mu \\ \underline{a}_{(1)} \\ \underline{a}_{(2)} \end{bmatrix} = \chi^{(2)} \Psi_{123}^{(123)} \underline{\eta} \quad \dots (3.4)$$

とる。ただし,  $\chi^{(0)} = F^{(123)}$ ,  $\chi^{(1)} = [F_1^{(123)}, F_2^{(123)}, F_3^{(123)}]$ ,  $\chi^{(2)} = [F_{12}^{(123)}, F_{13}^{(123)}, F_{23}^{(123)}]$ ,  
 $\chi^{(s)} = D_W^{(3)} \chi^{(s)}$ ,  $s=0,1,2$ .  $\underline{a}_{(1)} = (a_1, a_2, a_3)$ ,  $\underline{a}_{(2)} = (a_{12}, a_{13}, a_{23})$ .

(3.4)はパラメータ  $\mu$ ,  $a_p(i_p)$ ,  $a_{pq}(i_p, i_q)$  がウエイト付きの平方和

$$\begin{aligned} & \sum_{i_1} \sum_{i_2} \sum_{i_3} W(i_1, i_2, i_3) \left\{ \eta(i_1, i_2, i_3) - \mu - \sum_{p=1}^3 a_p(i_p) - \sum_{\substack{p, q \\ 1 \leq p < q \leq 3}} a_{pq}(i_p, i_q) \right\}^2 \\ &= \left\| \Psi_{123}^{(123)} \underline{\eta} - \Psi^{(123)} \mu - \sum_{p=1}^3 \Psi_p^{(123)} a_p - \sum_{\substack{p, q \\ 1 \leq p < q \leq 3}} \Psi_{pq}^{(123)} a_{pq} \right\|^2 \\ &= \left\| \Psi_{123}^{(123)} \underline{\eta} - \chi^{(0)} \mu - \chi^{(1)} \underline{a}_{(1)} - \chi^{(2)} \underline{a}_{(2)} \right\|^2 \end{aligned}$$

を最小にするように定義されていることを示している。

### 定理3

$\{W(i_1, i_2, i_3)\}$  が定義ウエイトであるための必要十分条件は

任意の  $(\varepsilon_1, \varepsilon_2, \varepsilon_3) \neq (1, 1, 1)$  に対して

$$\text{Rank } D_W^{(3)} A_{\varepsilon_1 \varepsilon_2 \varepsilon_3}^{\#} D_W^{(3)} = \text{Rank } A_{\varepsilon_1 \varepsilon_2 \varepsilon_3}^{\#}$$

が成立することである。ただし  $A_{\varepsilon_1 \varepsilon_2 \varepsilon_3}^{\#} = A_{\varepsilon_1}^{\#} \otimes A_{\varepsilon_2}^{\#} \otimes A_{\varepsilon_3}^{\#}$ ,

$$A_{\varepsilon_p}^{\#} = \varepsilon_p (I_{l_p} - \frac{1}{l_p} \mathbf{1}_{l_p}) + (1 - \varepsilon_p) \frac{1}{l_p} \mathbf{1}_{l_p}, \quad \varepsilon_p = 0, \text{ 又は } 1, \quad D_W^{(3)} = (D_W^{(3)})^2.$$

[証明]

(3.1) と (3.2) よりパラメータの決定方程式



$$\begin{bmatrix} X^{(0)} & X^{(1)} & X^{(2)} & X^{(3)} \\ 0 & C^{(1)} & 0 & 0 \\ 0 & 0 & C^{(2)} & 0 \\ 0 & 0 & 0 & C^{(3)} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} M \\ \underline{a}_{(1)} \\ \underline{a}_{(2)} \\ \underline{a}_{(3)} \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \underline{1} \\ 0 \\ 0 \\ 0 \end{bmatrix} \quad \dots \quad (3.5)$$

えうる. ただし,  $X^{(3)} = F^{(123)}$ ,  $\underline{a}_{(3)} = \underline{a}_{123}$

$$C^{(1)} = \sum_{P=1}^3 \oplus \Psi^{(123)} \Psi_P^{(123)}, \quad C^{(2)} = \sum_P \sum_{\substack{q \\ 1 \leq P < q \leq 3}} \oplus \begin{bmatrix} \Psi_P^{(123)} \\ \Psi_q^{(123)} \end{bmatrix} \Psi_{Pq}^{(123)}, \quad C^{(3)} = \Psi^{(2)} \Psi_{123}^{(123)}$$

(3.5)の左辺の係数行列の階数は

$$\begin{aligned} & \text{Rank} [X^{(0)}, X^{(1)}, X^{(2)}, X^{(3)}] + \sum_{P=1}^3 \text{Rank} C^{(P)} \\ &= l_1 l_2 l_3 + \sum_P \sum_{\substack{q \\ 1 \leq P < q \leq 3}} \text{Rank} \begin{bmatrix} \Psi_P^{(123)} \\ \Psi_q^{(123)} \end{bmatrix} \Psi_{Pq}^{(123)} + \text{Rank} C^{(3)} \end{aligned}$$

に等しい.

$$\begin{aligned} & \text{Rank} \begin{bmatrix} \Psi_1^{(123)} \\ \Psi_2^{(123)} \end{bmatrix} \Psi_{12}^{(123)} = \text{Rank} \Psi_{12}^{(123)} [\Psi_1^{(123)}, \Psi_2^{(123)}] = \text{Rank} D_{12} [\underline{I}_{l_1} \otimes \underline{I}_{l_2}, \underline{I}_{l_1} \otimes \underline{I}_{l_2}] \\ &= \text{Rank} [\underline{I}_{l_1} \otimes \underline{I}_{l_2}, \underline{I}_{l_1} \otimes \underline{I}_{l_2}] = l_1 + l_2 - 1 \end{aligned}$$

ただし,  $D_{12} = \text{diag}(W(1,1,\cdot), \dots, W(1,l_2,\cdot), W(2,1,\cdot), \dots, W(l_1,l_2,\cdot))$ .  $W(i_1, i_2, \cdot) = \sum_{l_3} W(i_1, i_2, l_3)$

同様にして.

$$\text{Rank} \begin{bmatrix} \Psi_1^{(123)} \\ \Psi_3^{(123)} \end{bmatrix} \Psi_{13}^{(123)} = l_1 + l_3 - 1, \quad \text{Rank} \begin{bmatrix} \Psi_2^{(123)} \\ \Psi_3^{(123)} \end{bmatrix} \Psi_{23}^{(123)} = l_2 + l_3 - 1$$

えうる. 従つて,  $W(i_1, i_2, i_3)$  が定義内エイトであるための必要十分条件は

$$\text{Rank} C^{(3)} = l_1 l_2 + l_1 l_3 + l_2 l_3 - l_1 - l_2 - l_3 + 1$$

であることが分る.

$$\begin{aligned}
 \text{Rang } C^{(3)} &= \text{Rang } X^{(2)'} D_W^{(3)} = \text{Rang } D_W^{(3)} X^{(2)} X^{(2)'} D_W^{(3)} \\
 &= \text{Rang } D_W^{(3)} (\mathbb{I}_{l_1} \otimes \mathbb{I}_{l_2} \otimes \mathbb{I}_{l_3} + \mathbb{I}_{l_1} \otimes \mathbb{I}_{l_2} \otimes \mathbb{I}_{l_3}) D_W^{(3)} \\
 &= \text{Rang } D_W^{(3)} \left\{ \sum_{(\varepsilon_1, \varepsilon_2, \varepsilon_3)} \left( \sum_{p=1}^3 (1 - \varepsilon_p) \lambda_p \right) A_{\varepsilon_1 \varepsilon_2 \varepsilon_3}^\# \right\} D_W^{(3)} = \sum_{\substack{(\varepsilon_1, \varepsilon_2, \varepsilon_3) \\ (\varepsilon_1, \varepsilon_2, \varepsilon_3) \neq (1,1,1)}} \text{Rang } D_W^{(3)} A_{\varepsilon_1 \varepsilon_2 \varepsilon_3}^\# D_W^{(3)} \\
 &\leq \sum_{\substack{(\varepsilon_1, \varepsilon_2, \varepsilon_3) \\ (\varepsilon_1, \varepsilon_2, \varepsilon_3) \neq (1,1,1)}} \text{Rang } A_{\varepsilon_1 \varepsilon_2 \varepsilon_3}^\# = \sum_{\substack{(\varepsilon_1, \varepsilon_2, \varepsilon_3) \\ (\varepsilon_1, \varepsilon_2, \varepsilon_3) \neq (1,1,1)}} (-1)^{\varepsilon_1 + \varepsilon_2 + \varepsilon_3 + 3} (\varepsilon_1 l_1 - 1)(\varepsilon_2 l_2 - 1)(\varepsilon_3 l_3 - 1) \\
 &= l_1 l_2 + l_1 l_3 + l_2 l_3 - l_1 - l_2 - l_3 + 1
 \end{aligned}$$

上の不等式において、等号がなりたつのは

任意の  $(\varepsilon_1, \varepsilon_2, \varepsilon_3) \neq (1,1,1)$  に対して  $\text{Rang } D_W^{(3)} A_{\varepsilon_1 \varepsilon_2 \varepsilon_3}^\# D_W^{(3)} = \text{Rang } A_{\varepsilon_1 \varepsilon_2 \varepsilon_3}^\#$  が成立するときに限るから定理の結果をうる.

#### 定理4

ある定義ウエイトより定まるる零因交互作用が可べで零であると、任意の定義ウエイトより定まるる零因交互作用が可べで零になる. このとき、任意の  $i_p$  に対して  $\sum_{i_q} \lambda_{p q}(i_p, i_q) = 0$ , 任意の  $i_q$  に対して  $\sum_{i_p} \lambda_{p q}(i_p, i_q) = 0$  とみたり任意の  $\{\lambda_{p q}(i_p, i_q)\}$  に対して.

$$\sum_{i_p=1}^{l_p} \sum_{i_q=1}^{l_q} \lambda_{p q}(i_p, i_q) \lambda_{p q}(i_p, i_q)$$

は定義ウエイトに依らない値である.

(証明)

ある定義ウエイト  $\{W^{(0)}(i_1, i_2, i_3)\}$  から定まる  $\mu$ ,  $a_p(i_p)$ ,  $a_{p q}(i_p, i_q)$ ,  $a_{23}(i_2, i_3)$  を  $M^{(0)}$ ,  $a_p^{(0)}(i_p)$ ,  $a_{p q}^{(0)}(i_p, i_q)$ ,  $a_{23}^{(0)}(i_2, i_3)$  とし,

任意の  $l_1, l_2, l_3$  に対して,  $u_{123}^{(0)}(l_1, l_2, l_3) = 0$

さう, このとき,

$$\eta(l_1, l_2, l_3) = M^{(0)} + \sum_{p=1}^3 \alpha_p^{(0)}(l_p) + \sum_{\substack{p \\ 1 \leq p < q \leq 3}} \sum_q \alpha_{pq}^{(0)}(l_p, l_q) \quad \dots (3.6)$$

(3.6) を行列表示して,

$$\begin{aligned} \underline{\eta} &= F^{(123)} M^{(0)} + \sum_{p=1}^3 F_p^{(123)} \underline{\alpha}_p^{(0)} + \sum_{\substack{p \\ 1 \leq p < q \leq 3}} \sum_q F_{pq}^{(123)} \underline{\alpha}_{pq}^{(0)} \\ &= \begin{bmatrix} X^{(0)} & X^{(1)} & X^{(2)} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} M^{(0)} \\ \underline{\alpha}_{(1)}^{(0)} \\ \underline{\alpha}_{(2)}^{(0)} \end{bmatrix} \quad \dots (3.7) \end{aligned}$$

さうる. ただし,  $\underline{\alpha}_{(1)}^{(0)}$ ,  $\underline{\alpha}_{(2)}^{(0)}$  は成分がそれぞれ  $\{\alpha_p^{(0)}(l_p)\}$ ,  $\{\alpha_{pq}^{(0)}(l_p, l_q)\}$  である  $\underline{\alpha}_{(1)}$ ,  $\underline{\alpha}_{(2)}$  に対応するベクトルである.

任意の定義ウエイト  $\{W(l_1, l_2, l_3)\}$  に対して, (3.4) より,

$$\begin{bmatrix} X^{(2)/X^{(0)}} & X^{(2)/X^{(1)}} & X^{(2)/X^{(2)}} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} M \\ \underline{\alpha}_{(1)} \\ \underline{\alpha}_{(2)} \end{bmatrix} = X^{(2)} D_{W}^{(3)} \underline{\eta} \quad \dots (3.8)$$

さうる. (3.7) を (3.8) に代入して, 整理すると

$$\begin{bmatrix} X^{(2)/X^{(0)}} & X^{(2)/X^{(1)}} & X^{(2)/X^{(2)}} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} M - M^{(0)} \\ \underline{\alpha}_{(1)} - \underline{\alpha}_{(1)}^{(0)} \\ \underline{\alpha}_{(2)} - \underline{\alpha}_{(2)}^{(0)} \end{bmatrix} = 0 \quad \dots (3.9)$$

さうる.  $\{W(l_1, l_2, l_3)\}$  が定義ウエイトであるから

$$\text{Rank} [X^{(2)/X^{(0)}}, X^{(2)/X^{(1)}}, X^{(2)/X^{(2)}}] = \text{Rank} [X^{(2)/X^{(0)}}] = l_1 l_2 + l_1 l_3 + l_2 l_3 - l_1 - l_2 - l_3 + 1$$

である

	1	$-I_{l_1}$	0	0			
	-1	0	$I_{l_2}$	0	0	0	
	-1	0	0	$I_{l_3}$	0	0	
行列	0	$-I_{l_1}$	0	0	$I_{l_1} \otimes I_{l_2}$	0	0
	0	0	$-I_{l_2}$	0	$I_{l_1} \otimes I_{l_2}$	0	0
	0	0	0	$-I_{l_3}$	0	$I_{l_1} \otimes I_{l_3}$	0
	0	0	0	0	$I_{l_2} \otimes I_{l_3}$	0	0
	0	$-I_{l_2}$	0	0	0	$I_{l_2} \otimes I_{l_3}$	0
	0	0	$-I_{l_3}$	0	0	$I_{l_2} \otimes I_{l_3}$	0

の各行ベクトルは行列

$\begin{matrix} \chi^{(1)} \chi^{(1)} \\ \chi^{(1)} \chi^{(2)} \\ \chi^{(2)} \chi^{(1)} \end{matrix}$

のすべての列ベクトルと直交し、その階数は  $2(l_1+l_2+l_3)$  である。従って

$$\mu - \mu^{(0)} = -b_1 - b_2 - b_3$$

$$A_p(i_p) - A_p^{(0)}(i_p) = b_p - \sum_{\substack{1 \leq r < s \leq 3 \\ r=p \text{ 又は } s=p}} b_p^{(rs)}(i_p), \quad p=1, 2, 3. \quad \dots(3.10)$$

$$A_{pq}(i_p, i_q) - A_{pq}^{(0)}(i_p, i_q) = b_p^{(pq)}(i_p) + b_q^{(pq)}(i_q), \quad 1 \leq p < q \leq 3$$

まうる。ただし、 $b_p, b_p^{(pq)}(i_p), b_q^{(pq)}(i_q), (p=1, 2, 3, 1 \leq p < q \leq 3)$  は任意の定数である。(3.10)より。

$$\mu + \sum_{p=1}^3 A_p(i_p) + \sum_{\substack{p=1 \\ 1 \leq p < q \leq 3}} \sum_{q=1}^3 A_{pq}(i_p, i_q) = \mu^{(0)} + \sum_{p=1}^3 A_p^{(0)}(i_p) + \sum_{\substack{p=1 \\ 1 \leq p < q \leq 3}} \sum_{q=1}^3 A_{pq}^{(0)}(i_p, i_q) = \eta(i_1, i_2, i_3)$$

まうる。従って、任意の  $i_1, i_2, i_3$  に対して

$$A_{123}(i_1, i_2, i_3) = 0$$

となる。(3.10)より、容易に

$$\sum_{i_p} \sum_{i_q} \lambda_{pq}(i_p, i_q) A_{pq}(i_p, i_q) = \sum_{i_p} \sum_{i_q} \lambda_{pq}(i_p, i_q) A_{pq}^{(0)}(i_p, i_q)$$

が分る。

## 参 考 文 献

[1] Rao, C.R. (1952). Advanced statistical methods in biometric research. Wiley, New York.

[2] Scheffé, H. (1959). The analysis of variance. Wiley, New York.

## あとがき

この講究録は、数理解析研究所における実験計画法共同研究会(才1区、昭和41年3月21~23日開催、才2区、昭和41年2月1~3日開催)における発表内容を整理集録したものである。

共同研究会の組織者として御寄稿いただいた方々、活潑な研究討論に御参加下さった方々、特に、並々ならぬお世話をいただいた京都大学数理解析研究所長福原満洲雄教授はじめ関係の方々に深く感謝する。

広島大学理学部 山本純恭